

能登の民話五編



およう 三郎平

かうおきんや作



梶山俊夫画



能登の民話
五編

お里な 三郎平

かつおきんが作

梶山俊夫

電



N. D. C. 913/224 P /23cm

かつおきんや作品集 6

能登の民話五編

■ おりよう三郎平 ■

一九七八年三月三十日 三版発行

著 者 かつおきんや

発行者 東 政彦

発行所 株式会社 アリス館牧新社

東京都新宿区麁笥町四一 大崎ビル
電話(二六九)二〇八一―四

印刷 第一印刷

製 本 小高製本

・乱丁本・落丁本はおとりかえいたします

わかしかり、能^の登^とちうたり、おんっしし
のがたんと住^すんでおるとこや。
てんぐやら、かわおそやらが、あやしいこ
として見せるのは、あたりまえの話やろ。
「おらとこαあんか（鬼き）もな、子^こと^とのこ
ろ、けつねにたまくらかされてαう……」
いや、それはかりてはないぞ。
もい、なほへ、α、α、α、α、α、みんなかう
と、んなうまのこと何にてもはける。
「せと、にござる、あのいよいよさまへ地^じ蔵^{ざう}さ

ましもな、夜さうになると、うつくしいよ
うろへ女の人にはけて、歩きだすことがある。
どんなべっぴんさんやぞう。
そんなものにおうたときにはな、まつげに
つばつけて見りや、いっぺんにわかるぞな。
またぐらからのぞいて見りや、よくともはっ
きりわかるぞな。
ま、ほういいう話を、ちよっこし、しるか。
ねぶらんと、よう聞いとろぞ。

かつお せんや

ふさのむかし話

1

長者のよめさま

ちようじゃ

51



よめぐり



おりよう
三郎平

167



ごえもん
五右衛門の親

123

ふさのむかし話





むかし、むかし、唐川^{からかわ}に、ふさという名の娘^{むすめ}がおったそうなの。

ふさは、村一番の貧乏百姓^{びんぼうびやくしやう}のひとり娘^{むすめ}で、とうとうおばばと三人でくらしとった。

「むかしいうてくれ。なあ、おばば。」

と、ふさは、毎晩^{まいばん}おばばにせがんだ。おばばは、たったひとりの孫娘^{まごむすめ}がかわいくて、

「おう、おう。なんの話をしてやるかいの。」

と、目を細くしてふさに聞く。

「きまっとるがい。」

と、ふさは、おばばの顔を見る。

「なんと、同じ話ばかり聞きたがるたんち、（子ども）やろのう。」

といいながら、チロチロもえるいろりの火のそばで、石うす^{いしうす}をひきひき、おばばは話しはじめる。

「とんとむかしがあったとい。」

そこで、ふさは、おばばのひざに片手^{かたて}をのせて、ちょこんとすわって、いつものように

相の手をいれる。

「ほいとい。」

「ある年の、年の暮やったとい。」

「ほいとい。」

「神さまが、森や野原に住むけものを全部集めたとい。」

「ほいとい。」

「そして神さまな、いうたとい、あしたは正月元日や。」

「ほいとい。」

「おまいらち、元日の朝は、かならずあいさつにくるんやぞ。」

「ほいとい。」

「そのかわり、一番から十二番まで、早うきた順に、一年のあいだ、けものの大將にしてやるぞ。」

「ほいとい。」

「けものはみんな大喜びやったとい。」

「ほいとい。」……

すると、天井の太いはりの上を、ねずみが二、三びき、チュウチュウ、キイキイとなきながら、走っていったりきたりした。ふさはほっそりとした白い顔をあげて、ねずみをしかった。

「おまいらちの話やがいや。かたい者になって、聞かっしま。」

それでねずみは静かになり、ふさはおぼばにつづきをせがんだ。おぼばは、前の晩も、その前の晩も、そのまた前の晩も、その前も、いつも話すの一言もちがわさず、同じ話を語って聞かせた。

五歳ぐらいのころに聞きはじめて、もう五年あまりも、いつもかも、この話を聞いて、ふさは育った。何べん、何十べん、何百べん聞いても、ふさは、少しもあきなかった。これを聞くと、安心して眠れるのやった。

ふさがこの話をそんなに好きなことは、村でだれひとり知らない者はおらんようになっておった。ふさは、村の小さな子どもたちに、自分から語って聞かせたりもした。

……「けものたちは、おらこそ一番やと、たがいにいあつたとい。」

「ほいとい。」

「その声があんまりにぎわしかったもんで、居眠りしとったねこが目をさましてしもうた

とい。」

「ほいとい。」

「ねこは、ちょうど通りがかったねずみに、みんなが何をさわいでおるのか聞いたとい。」

「ほいとい。」

「そして、ねずみから神さまのことばを聞くと、自分もいこうと思うたとい。」

「ほいとい。」

「そこで、ねずみに、元日がんじつはいつやと聞いたとい。」

「ほいとい。」

「ねずみは、ほんとはあしたやけれど、あさってやというたとい。」

「ほいとい。」

「それでねこは安気あんきになって、また眠ねむってしもうたとい。」

「ほいとい。」……

そこで小さな子は、思わずいってしもう。

「だ、だ、だ、ねこやなあ。」

ふさもうなずく。

「ねこって、だらなものなんや。」

ふさの家では、ねこは飼ったことがない。子どもは、またいう。

「なあ、ねずみ見せてくれんか、ふさ。」

ふさは、うれしそうな顔をして、たもとやふところから、ねずみをだしてみせる。うちに遊び相手はいなかったし、おとなしいたちやったから、ふさは、ひとりぼっちでいることが多かった。そんなとき、ふさの遊び相手は、ねずみやった。自分のたべるひえ飯をかならず少しとおいて、ねずみにやっては、かわいがったから、ねずみの方でも、ふさにいつもくっついていた。ふさのとうとはそれを見て、

「ねずみなんか、すててしまえ！」

と、どなったこともあったけど、おぼろがかばってくれた。

「ほかに遊び相手もおらんもの……。それに、ねずみのおる家は火事にならんと、むかしからいうがいの。」

それ以上、とうとはふさをせめなかった。村の子どもたちは、ふさの手のひらにのっておとなしくしておるねずみを見てめずらしがり、村のおとなたちはいいあった。

「あの子は、ねずみと兄弟みたいやの。」

ふさは、手のひらの上でねずみを遊ばせながら話をつづけた。

……「けものの中でも足ののろい牛は、ひとりで考えたとい。」

「ほいとい。」

「おらみたいのろまは、今のうちから歩かんと、まにあわん。」

「ほいとい。」

「それで夜中に、だれも知らんまに歩きだしたとい。」

「ほいとい。」

「ところが、それを見とった者がおったとい。」

「ほいとい。」

「ねずみが、こっそり、牛の背中にとびのったとい。」

「ほいとい。」

「一晩かかって、牛は、神さまの御殿の門の前についたとい。」

「ほいとい。」

「朝になって、門番な、ギギギーッと、門をあけたとい。」

「ほいとい。」



「ドッコイショと牛が歩きかけたとき、ねずみがチヨロチヨロッと走っていった、まっ先に門にすべりこんだとい。」

「ほいとい。」

「それで、ねずみが一番、牛が二番になったとい。」

「ほいとい。」

「それからつぎつぎと、とら、うさぎ、りゅう、へび、うま、ひつじ、さる、にわとり、いぬ、いのししの順で、やってきたとい。」

「ほいとい。」

「ねこは一日ぐっすり寝て、つぎの日の朝いったとい。」

「ほいとい。」

「そして、門番に、顔を洗って出てこいやと、さんざんに笑われたとい。」

「ほいとい。」

「それから、ねこは、ひまさえありや、顔をなでるようになったとい。」

「ほいとい。」

「そして、ねこは、ねずみを見さえすりや、ぼっかけるようになったとい。」